

# 『光源氏はなぜ須磨へ流謫しなけりなかつたのか』

井 上 富実子

## 目次

- I はじめに
- II 弘徽殿女御による恨殺
- III 桐壺の更衣
- IV 弘徽殿女御の源氏、藤壺への感情
- V 右大臣方の陰謀と朧月夜の登場
- VI まとめ

## I はじめに

須磨の地へ源氏はわが身に振りかかろうとする「大きな恥」を避けんがため、自らの意思をもって赴く。「これより大きな恥にのぞまぬさきに世をのがれなむ」（須磨の巻・以下「巻」を略す）と赴かざるをえなかつた状況があつたとして

「流謫である」との読みも定説である。<sup>(1)</sup> それでは、なぜ、源氏は須磨へ行く必要があったのだろうか。それは、越前や肥後でなく須磨、明石でなければならなかったか。今回は須磨の巻を読む上で、プロットから、また源氏流謫の伏線を内包する巻として、花宴の巻は蔑ろにはできなく、決定的な引きがねとなったその事件の発端が誰の陰謀により目論まれたかを本文をみることでよって推察し、また他の巻には比類のない、妖艶で官能的な筆法により朧月夜の君が登場するのに留意し、この登場理由の一考察を試み、物語の構成から見る朧月夜の人物造型論に及ぶこととしたい。なお本文及び対訳は新潮日本古典集成『源氏物語』による。

## Ⅱ 弘徽殿女御による恨殺

### ① 桐壺の更衣との確執

桐壺帝に仕える弘徽殿女御と桐壺の更衣は対照的な人物として造型されている。「人より先に参りたまひてやむごとなき御思ひなべてならず、御子たちなどもおはしませば、この御方の御いさめをのみぞ、なほわづらはしう、心苦しう思ひきこえさせたまひける」(桐壺・一二三頁)と弘徽殿女御は帝から思われる。一方で、桐壺の更衣は「いとやむごとなき際にはあらぬが、すぐれて時めきたまふありけり」(桐壺・一一頁)と、帝の寵愛を一身に受けていた。この寵愛は他の女御更衣の嫉みをかったことは言うまでもなく、さらに桐壺の更衣所生の御子の誕生は弘徽殿の女御にわが子、第一皇子の立場までを脅かしかねないと思わせる。

弘徽殿女御の恨殺は以前からの桐壺の更衣に対する妬み、嫉妬とともに日ごとに増長されて行ったと見ることできる。そしてついに源氏を須磨に退居させると言う決定的な要因を生じさせる首謀者として位置づけられていく。

また御子の御袴着の儀式も第一皇子に劣ることなく執り行われるが、この扱いさえも弘徽殿の女御にしてみればわが子

の皇位継承が無事なされるかの不安がよぎったであろうし、つまりは右大臣方一族の覇権を脅かすなものでもなかっただろうことが想像される。その年の夏に桐壺の更衣は日頃病気がちであったことにもよるが、病を患いやがて絶えはててしまうが、弘徽殿女御の更衣に対する恨みは薄らぐことなく執拗にわだかまる。更衣の死に帝の悲嘆は尋常ではなく、その様子をご覧になる人までもしみじみとした秋であり、その様な状況下にあっても「亡きあとまで、人の胸明くまじかりける人の御おぼえかな」とぞ、弘徽殿などにはなほ許しなうのたまひける。(桐壺・一九頁)」と弘徽殿の女御は桐壺の更衣が死してまでも許すことなく、手きびしかったことが察せられる。このことは弘徽殿の女御、そして桐壺の更衣の死因が何に因るものかを推測したとき両者にはともに確執があったことを証するものである。

やがて秋になり帝は風の音や虫の音につけてもただわけもなく悲しく思われるのに、

「弘徽殿には、久しく上の御局にもうのぼりたまはず、月のおもしろきに、夜ふくるまで遊びをぞしたまふなる。いとすざまじう、ものしときこしめす。」(桐壺・二八頁)と、さらに、「いとおし立ちかどかどしきところものしたまふ御方にて、ことにもあらずおぼし消ちてもてなしたまふなるべし」(桐壺・二八頁)と気が強くかどのあるお方で、更衣の死など無視してお振る舞いなされるのであらうと、その行動は人目を引いた。

## ② 御子(源氏)の成長と藤壺入内

第一皇子は皇太子に立ち、弘徽殿女御も安堵されるが、御子の才能は「世に知らずさとうかしこくおはすれば、あまり恐ろしきまで御覧ず。」(桐壺・三〇頁)と帝があまりのことで恐ろしいとまで思われる程であった。弘徽殿女御はこの御子を退けたいと望むが、日ごとに世人の評判になって行く御子を遠ざけるわけにいかなくなる。「いみじき武士、仇敵なりとも、見てはうち笑まれぬべきさまのしたまへれば、えさし放ちたまはず」。(桐壺・三〇頁)

年月がたつにつれても、帝は桐壺の更衣のことを忘れることはできなかった。帝つきの女房達はしかるべき姫君を探し

求めるに、先代の御世に任命された典侍は先代第四皇女を見知りて、帝に桐壺の更衣に良く似た人であると奉上なさるが、その際も、皇女の母后は「あな恐ろしや、春宮の女御のいとさがなくて、桐壺の更衣の、あらはにはかなくもてなされにし例もゆゆしうと、おぼしつづみて……」（桐壺・三三頁）と用心され、入内の返事を引き延ばすが、この言葉からも弘徽殿女御の人物評が、内裏の内外にいかように流言されていたかを知ることができる。

先帝の第四皇女は桐壺帝に入内し藤壺を賜る。典侍が桐壺の更衣によく似た人という。源姓を賜わり「源氏」となった御子は次第に藤壺に好意を寄せるようになる。藤壺とも仲のよくない弘徽殿の女御にはさらに源氏を不快だと思うようになる。「こよなう心寄せきこえたまへれば、弘徽殿の女御、またこの宮とも御仲そばそばしきゆゑうちそへてもとよりの憎さも立ちいでて、ものしとおぼしたり。」（桐壺・三五頁）

### III 桐壺の更衣

#### ① 更衣の死

弘徽殿女御の桐壺の更衣に対する恨みは物語上に頻繁に見出すが、桐壺の更衣の恨みは、行間から読むしかない。桐壺の更衣の死はもとからの心労が度重なったの病との見方があるが、直接の原因はただ「はかなきここにわづらひて」（桐壺・一五頁）とだけで明確ではない。明確でないところに「心労」であったとも読めよう。更衣は、

「限りとて別るる道の悲しきにいかまほしきは命なりけり　いとかく思ふたまへましかば」（桐壺・一六頁）と、息も絶えつつ、「生きたい命なのです」と言い、さらに「こんなふうになると存じていましたならば」と言葉に余韻を残して宮中をさがる。幼い子を残しての死出の旅は、さぞかしこの世に絆を残し、死しても死に切れなかったらうと思われる。さらに「このようになると分かっていたならば」と言う最後の更衣の言葉は、ではどう生きたかったのだろうかと言う、新

たな疑問を生じさせる。更衣が物語上に占める紙面はさほど多くはないが、更衣が死にあたって残されたほだしは物語展開の上で、起点的要素を提示してはいないだろうか。また更衣が夭折であったことに、作者は早世が及ぼすさまざまな問題を提示され、壮大な物語の執筆にあたったとも言えよう。

## ② 桐壺の更衣と父大納言の遺言

桐壺の更衣の死後、鞍負の命婦は帝の使いにより更衣の里に出掛ける。里の母君と物語るに、更衣の宮仕えは父の故大納言の遺言によるものであったことを知るのである。遺言を全うしたことによる結果について「前の世ゆかしうなむ」（桐壺・二四頁）「どんな前世の因縁なのだろうか」と桐壺帝は言われる。

## ③ 若紫↓藤壺↓桐壺の更衣 / 明石の上と桐壺更衣の血縁

「若紫の巻」は源氏物語中の主要ヒロイン若紫と明石の上の存在を始めて顕示する巻である。北山で見だす若紫と海辺で巡り合う明石の上、両者が同一の巻で登場することも、興味あるところである。

若紫は藤壺の形代として源氏の前に登場するが、それは時間を若紫から、藤壺そして桐壺の更衣へと遡及すればこの線上には、母君、桐壺の更衣への源氏の慕情が見えてくる。一方明石の上は源氏が瘡病の治療のために訪れた北山で供人の良清から播磨の明石の浦の話を聞くに至る。その話の中に登場するのが「海龍王の后になるべきいつき女ななり」（若紫・一八七頁）と人々から噂されていると言う明石の上であった。実際は明石の巻で「あるじの入道、行ひ勤めたるさま、いみじう思ひすましたるを、ただこの娘ひとりをもてわづらひたるけしき、いとかたはらいたきまで時々漏らし愁へきこゆ。」（明石・二七二頁）と地の文に登場する。

明石入道はわが娘を源氏に奉ろうと妻にその意思を伝えるが、妻は世間の母親と同様に「罪にあたりて流されておはしたらむ人をしも思ひかけむ。」（須磨・二四八頁）と返答する。その折りに入道は桐壺の更衣と自分との血縁関係を「故母

御息所は、おのが叔父にものしたまひし按察使の大納言の御娘なり」(須磨・二四九頁)と語るのである。桐壺の更衣と従兄弟関係にあることがここで明確に示される。明石の上の血脈にも桐壺の更衣との結びつきがあったのである。若紫の巻は明石の巻への伏線が内包されている。

#### IV 弘徽殿女御の源氏、藤壺への感情

源氏十八歳、中将のころ、朱雀院の行幸が神無月の十日過ぎに行われた。その前に当日は見る事ができない後宮の妃方のために試楽が行われた。源氏は頭の中將とともに青海波を舞う。その舞のすばらしさは比類がないほど美しく、見る者の心を捉えた。常日頃、源氏を疎ましく思う弘徽殿女御は「神など、空にめでつべき容貌かな。うたてゆゆし」(紅葉賀・一二頁)と仰る。また試楽の日の源氏の「詠果てて、袖うちなほしたまへるに、待ちとりたる楽のにぎははしきに、顔の色あひまさりて、常よりも光ると見えたまふ。」(紅葉賀・一二頁)と、一段いつもよりいっそう美しくお見えになった源氏の御夕影を心配された桐壺帝は御誦経など、方々の寺にさせる。こうしたなさり方を弘徽殿の女御は「あながちなりと憎みきこえたまふ」(紅葉賀・一四頁)とひとりよがりな、なさりようだとお恨み申しあげる。

弘徽殿女御の源氏疎外は源氏の成長とともに拡大、公然化していったことが分かる。その恨みを飲むことをせず、公言されていることで知れよう。

藤壺は二月十余日皇子を出産する。内裏も宮人も喜ばれるが、弘徽殿女御が「うけはしげにのたまふと、聞きしを」(紅葉賀・二四頁)と呪うようなことをおっしゃていると藤壺はお聞きになる。源氏との不義の子の誕生という不安と苦悩、さらに産後の肥立ちもあって、弱気になっていた藤壺にこの言葉は逆に生きる力を与える。弘徽殿の女御の「うけはしげ」(「うけふ」・呪ふ)は出産で藤壺も新生児も死んで欲しいと呪うことをいう。皇子の誕生とあらば、仲のよろしくない関係

であるならば当然持つ感情である。その他にさらに「うけはしげ」なるものが、存在したかが問題なのであるが。前の巻きに戻り、若紫の巻で「藤壺宮、なやみたまふことありて、まかでたまへり」(若紫・二二二頁)と藤壺は病氣になられて里下がりをする。この機に源氏は王命婦を責め、藤壺との逢瀬を果たすことができる。

「まことに御こち例のやうにもおはしまさぬはいかなるにかと、人知れずおぼすこともありければ、心憂し。人は思ひ寄らぬことなれば、この月まで奏せさせたまはざりけることと、おどろききこゆ。わが御心一つには、しるうおぼしわくこともありけり。御湯殿などにも親しうつかうまつりて、何ごとの御けしきをもしく見たてまつり知れる、御乳母子の弁、命婦などぞ、あやしと思へど、かたみに言ひあはすべきにあらねば、なほのがれたかりける御宿世をぞ、命婦はあさましと思ふ。内裏には、御もののけのまぎれにて、とみにけしきなうおはしましけるやうにぞ奏しけむかし。見る人もさのみ思ひけり。」(若紫・二二四頁)と、藤壺も王命婦も、さらに乳母子の弁は悪阻で体の具合が悪いことに気づくが、しかし一部始終を知る本人をはじめ王命婦はそれを隠すのである。だが、このことは源氏自らが見た夢の夢合わせに端を発し、「この女御の御こと聞きたまひて、もしさるやうもやとおぼしあはせたまふに、」(若紫・二二五頁)と源氏は藤壺の懐妊を噂で耳にしてしまうのである。源氏の耳にまで入ると言う状況下では、藤壺の懐妊は保護され秘密にされるどころか、世間に流言して行ったと読むことができる。

紅葉賀の巻にて藤壺は源氏の子であることを立証するごとく、桐壺帝や周辺の人々の予想に遅れた二月十余日に皇子を出生されるが、この時の弘徽殿女御の呪うような言葉の持つ意味が藤壺を奮い立たせるほどのものであったと思えるため、戦線布告の意味を持っていたのではないだろうか。藤壺はわが子と源氏、さらに一族の行く末を思いやり自己の甘えを払拭したと思える。

源氏と藤壺の関係を疑う弘徽殿女御は、さらに源氏の好色家という性を利用することにする。

## V 右大臣方の陰謀と朧月夜の登場

### ① 皇子誕生と藤壺の昇位

紅葉賀の巻では十月に入り藤壺は懷妊のために里に下がるが、源氏は逢う機会がないものかと逍遙する。やがて不義の子の誕生によって、その罪の大きさに双方とも懊悩する。葵の上は相変わらず打ち解けた様相はなく、源氏は自然と足が遠のくが、いつか心の解ける日があることを待つ事に努める。二条院に引き取った若草の少女の噂は帝をはじめとして葵の上にも届き、両者は心をいためる。

やがて藤壺の宮は後の位にのぼる。帝は讓位の志もあって藤壺を昇位させるが、これは皇子の強力な後見人とする必要性を感じていたことにもよった。このことを弘徽殿女御が快く思うはずはなく、「弘徽殿、いとど御心動きたまふ、ことわりなり。」(紅葉賀・四四頁)と心穏やかではない。弘徽殿女御もまた右大臣家の命運を負うて宮中に入内してきたことは変わりはないのである。自己の所生の皇子が天皇になるかならないかの時に心穏やかに構えられなどしない。桐壺帝の愛情がさめた今、寵妃方の陰にあって、専らの関心事は春宮が恙なく天皇に即位することに集結されていたであろう。

藤壺の中宮昇位は弘徽殿女御にとっては、自身の位の高低を言及するよりも、次第に源氏や藤壺に対する帝の鍾愛が春宮の地位を脅かしはしないであろうかと思う懸念の方が先行したと思える。弘徽殿女御は源氏のさまざまな情報を折りにふれて収集して来たにちがいない。

### ② 朧月夜譚歌

二月二十日すぎに南殿の桜の宴が催された。玉座の左右に東宮と藤壺中宮が座られる。「弘徽殿の女御、中宮のかくておはするを、をりふしごとにやすからずおぼせど、」(花宴・四九頁)と藤壺中宮の存在がおもしろくない。まして自分が座



るはずであった席についていようとは、許し難い光景であったことであろう。この日も源氏の才能は止むところをしらず、詩文におかれても「例の、人に異なり」（花宴・四九頁）といつものように異彩を発揮する。舞樂になると紅葉賀の折りが思い出され、源氏に是非にと帝は所望する。このひとさしの舞も同様に、人々を感嘆させ魅了させる。藤壺中宮はこのような場でも源氏の比類ないすばらしさを知ってくれるならば、帝はきっと疎かにはしないであろうと思う反面、弘徽殿女御があればどうも源氏を恨む理由が分からないと思うのである。「かうやうのをりにも、まづこの君を光にしたまへば、帝もいかでかおろそかにおぼされむ。中宮、御目のとまるにつけて、春宮の女御のあながちに憎みたまふらむもあやしう、わがかう思ふも心憂しとぞ、みづからおぼしかへされける。」（花宴・五一頁）

夜も遅く宴は果てた。上達部や后、春宮も帰られると、月は明るく射しだして源氏は酔い心地で、そのまま帰るのが惜しまれるのだった。藤壺の宮に会いたいと思ったのである。思ひは行動となった。清涼殿の宿直の人もすでに寝たとみえて、行く先を問われることなく源氏は飛香舎へ渡ろうとするが、入口の妻戸は閉じられて入ることができない。しかし藤壺の宮に会いたいと思う気持ちは、「閉じられている妻戸」という眼前の事実を理解すると同時に、消滅させることは出来ない。ましてや、愛する女性に逢いたいと思う気持ちは、諦めに転化させることなどできなかったろう。諦め切れない気持ちは逍遙へと向かわせた。妻戸になされた閉錠は、藤壺の宮が今夜の源氏の行動を予測していたかのごとくである。藤壺の本心はやはり源氏に逢いたいと思うが、逢ってはならない立場の苦しさは、堅く閉ざされた妻戸に藤壺の決心がオーバerrラップする。「藤壺わたりを、わりなう忍びてうかがひありけど、かたらふべき戸口も鎖してければ、うち嘆きて、なほあらじに、弘徽殿の細殿に立ち寄りたまへれば、三の口あきたり。」（花宴・五二頁）藤壺の自己の本心を殺してまで、全うしなければならぬ立場を選択し、それを負おうとする決心を知るか知らずか源氏の酔い心地の姿態がある。源氏が弘徽殿に立ち寄ると第三間にある遣戸が開いていたので、そつとのぞいてみると人気がないように思われた。「女御は、

上の御局にやがてまうのぼりたまひにければ、人少なるけはひなり。奥の枢戸もあきて、人音もせず。かやうにて、世の中のであやまちはするぞかし、と思ひて、やをらのぼりてのぞきたまふ。人は皆寝たるべし。いと若うをかしげなる声の、なべての人とは聞こえぬ、「朧月夜に似るものぞなき」と、うち誦じて、こなたざまには来るものか。(花宴・五二頁)「清涼殿にある「弘徽殿上の御局」に弘徽殿女御はあがられているために女房達も手薄である。奥の枢戸もあいている。源氏が「かやうにて、世の中のであやまちはするぞかし」と思ったことは、これから何事かが起こりそうな予感を匂わせている。

この時代の戸締りの習慣については、紫式部日記中にも寛弘五年六月ごろ、土御門殿でのことと考えられているが渡殿に局があつた紫式部の局の戸をたたく者があつた。「渡殿に寝たる夜、戸をたたく人ありと聞けど、おそろしさに、音もせで明かしたるつとめて、」(紫式部日記)とあり、また伊勢物語では内裏のうちの事ではないが、失踪した夫を妻が三年を待ちわび、その間に言い寄る人がいて、夫を待ち焦がれながらも再婚の承諾をするが、その新枕の夜に夫は帰ってくるのである。「この戸あけ給へ」とたたきけれど、あけて、歌をなむよみていだしたりける。(伊勢物語)とあり、夜になれば、盗賊などの災難をさけるために、戸締りをしたことがわかる。しかるにこの花宴が行われた夜、弘徽殿の後宮は何故か戸締りがされていなかったのである。三の口の入口が開けられていたのである。どうぞ入ってくださいとばかりに戸は開けられていた。戸の開口の事実を恣意であつたか、故意であつたかを決定付ける記述は見出せないが、偶然であつたとしてもこの偶然は故意にされた開口と全く同じに物語を展開させることになる。

さらに機運よく若く美しい声の女性が歌いながら来たのである。御酒も入りほろ酔い加減の源氏には、分別や理性の働く余地などなかったろうと思われる。「いとうれしくて、ふと袖をとらへたまふ。女、恐ろしと思へるけしきにて、」(花宴・五二頁)と衝動的な行為に及んでいる。藤壺への熱情の代償を何者かに求めざるをえないほどであつたのか。あるいは有明の君(朧月夜の君)自身の個性が即座に源氏の心を誘つたのであろうか。源氏の朧月夜感は「いと若うをかしげな

る声の、なべての人とは聞こえぬ」(〃・五二頁)であり「おぼろけならぬ契りと思ふ」(〃・五二頁和歌)そして「いとなつかしうをかしげなり」(〃・五三頁)な人であった。桐壺帝が桐壺の更衣を「なつかしうらうたげなり」(桐壺・二七頁)と回想されるが、朧月夜は「やさしく風情のある人」であり桐壺の更衣は「やさしく愛らしくかばってあげたい人」であった。何方の女性も「なつかし」くあることでは共通である。「なつかし」と男君から感じられる女性とはどのような女性であったか。朧月夜は出会った直後から「なつかし」を用いられて描写される女性であることに注目したい。ちなみに葵の巻で源氏は、紫の上と新枕を交わすが、その翌昼になかなか起きてこない紫の上の様子を窺いに西の対に出掛ける。その時に源氏は「若の御ありさまや、と、らうたく見たてまつりたまひて、日一日入りゐてなぐさめきこえたまへど、解けがたき御けしき、いとどらうたげなり」(葵・一一七頁)と「なつかし」表現はせずに「らうたし」表現をもって描写されることに留意したい。

それでは朧月夜は逢ったその瞬間、即刻に、「なつかし」と源氏に感じさせる人であったのだろうか。源氏のなした次の行動は朧月夜が妖艶で、官能的魅力をそなえた人物であったろうことを実証するが、その他に源氏が御酒を召されていた事や、藤壺恋しさがさらに拍車をかけたことなど考えあわせると、朧月夜の醸しだす魅力だけがさせた行為とは言えず、この「場」が与えた条件も考慮しなければならない。

ではこの源氏の衝動的行動を物語中で先見の明をもって見ていた人物は一体誰であろうか。まずは弘徽殿の女御が浮上する。先に遣戸の開口について、恣意か、故意かを問題とした。弘徽殿女御を名指しするとすれば、故意にされたことになるが、朧月夜はこの夜の行動を弘徽殿の女御から命ぜられていたとは、朧月夜の無垢で自然態ととれる動態からは推測しがたい。朧月夜は自己の意志で一人残っていたのかも知れない。何れにせよ、その真実をどう解釈するかは読者にまかされているが、朧月夜は作者によってこの場での登場を余儀なくされた。

桐壺の更衣の入内時点から心の安寧を得ることがなかったであろう弘徽殿女御には、更衣死してからその子源氏に対する、一挙手一投足が目障りであったはずである。しかも藤壺立后や源氏に対する帝のはからいが昨今著しく、このことでも自己の地位を危うくさせはしないかと、猜疑心を生じさせていたであろうこと等がある。この出来事は、春宮を無事、天皇に即位させるために右大臣家が丸となって攻略の途を歩み出す、その必然性が堰を切った最初の行動ではなかっただろうか。

では何故、五の君でなく、六の君（有明の君）が選ばれたのであろうか。六の君は卯月には春宮へ入内することが決められていた。春宮妃に決まった姫との関係を持つことは世間の非難をあびることは明らかである。このことを弘徽殿女御が見逃すわけではないが、だが最たる要因は、やはり六の君自身が醸しだす天稟ともいえる妖艶さに、好色家として世間にまかり通っている源氏が、目を奪われないことがないことを弘徽殿女御は推測されたに違いなく、六の君には内緒で源氏誘惑の立役者としたのではないだろうか。

こうした策略を知らない六の君。そして六の君の将来の幸せより、源氏失脚に懸ける弘徽殿女御の心境を読むとき、六の君（朧月夜）は源氏失脚工作の一員として、源氏の好色性を利用しようとする弘徽殿女御の掌中の珠として登場しなければならなかった。右大臣家の子女の中で六の君は弘徽殿女御とは姉、妹の関係であるが、弘徽殿女御とは親子ほどの歳の差があることから、母親が異なることも考えられ、弘徽殿女御の冷徹さが些か朧月夜にあてられた感がある。

花宴が終了し皆が退出された後の源氏の衝動的行為は弘徽殿女御の掌中にあったとも思える。六の君の風貌は賢木の巻で次のように描写されているが、源氏が咄嗟に朧月夜をわがものと思いたいと思う気持ちが次にても解されよう。

「女の御さまも、げにぞめでたき御さかりなる。重りかなるかたはいかがあらむ、をかしうなまめき若びたるこちして、見まほしき御けはひなり」（賢木・一四七頁）（全くすばらしい女盛りでいらっしやる。落着きといった点ではどうで

あろうか、しかし美しくあでやかで若々しい感じがしてこのましいご様子である」と朧月夜の女房である中納言の君は密会のでびきをするが、朧月夜を見てこのように思うのである。女房の目にも朧月夜が今、まさにすばらしい女盛りであると映るのであるから、ましてや源氏が見過ごすはずがなかったと想像される。

花宴からほぼ一月を経たところに右大臣家では藤の宴を催す。源氏も誘われてはいたのだが、行かないでいると、迎えが見えたのである。「源氏の君にも、内裏にて御対面のついでに、聞こえたまひしかど、おはせねば、くちをしう、ものの栄なしとおぼして、御子の四位の少将をたてまつりたまふ。」（花宴・五九頁）とある。この日、源氏は花宴で契った姫君の素性を確認することができる。こうしてみるとこの藤の宴は、右大臣家の競射会の竟宴ではあったが源氏を招聘するため、更には、源氏と朧月夜の関係さをさらに深淵させるために恰好の時宜に催された、あるいは、成した宴だったと言えるのではないか。

### ③ 右大臣家の奸計

四年後朧月夜は御匣殿から尚侍になったが、花宴の折りの出来事は忘れがたく思っている。源氏も世間の噂になることを案じながらも、以前以上に愛情が増すのであった。

「院のおはしましつる世こそ憚りたまひつれ、後の御心いちはやくて、かたがたおぼしつめたることどもの報いせむとおぼすべかめり。ことにふれてはしたなきことのみいでくれば、かかるべきこととはおぼししかど、見知りたまはぬ世の憂さに、立ちまふべくもおぼされず。」（賢木・一四四頁）

源氏は弘徽殿女御がこれまでに鬱積したことどもの報復にでるのではないかと、懸念しているのである。それと源氏が察知できる位、弘徽殿女御方の報復の時期は来ていたことになる。しかし時として、人の感情は分別とは裏腹に作用するものである。危険が身に迫っていることを承知しながらも源氏と朧月夜は密会を続けるのであり、朧月夜が瘡病の療養に

宮中を退出し実家へとさがった機に、源氏はまたもや夜な密会をするが、落雷が鳴るといふ氣象の思いもよらぬ悪戯によって、右大臣家の様相が一変される。ついに折り悪く右大臣に密会を知られてしまうのである。その時の状況の一端を草子地は次のように語る。朧月夜が「われにもあらでおはするを、子ながらもはづかしとおぼすらむかしと、さばかりの人はおぼし憚るべきぞかし。」（賢木・一八六頁）頭注はわが子ながらも、相手（朧月夜）が身の置き所もなく思っているらしいだろうと。右大臣ほどの身分の方なら、斟酌なさるべきなのだ。身分の高い人は人格教養が洗練されているはず。と通常ではなされない行為であることが分かる。だが、この時には演出されたように右大臣自らが登場するのである。決定的ダメージを源氏に与えるために、しかるべき人の確認行為の必然性があつたのである。氣象の変化は正しく右大臣家へ有利に働いたとみるべきか。この右大臣の行為も日頃の鬱積された思いが、理性を越えて行動化されたと思えるが、源氏の朧月夜との再三の逢瀬が右大臣の耳に届いていたとするならば、すでに準備されていた行動と読めないだろうか。

朧月夜は病をわづらっているながらもその魅力は失われるどころか、「わりなきさまにて夜な夜な対面したまふ。いと盛りに、にぎははしきはひしたまへる人の、すこしうちなやみて、痩せ痩せになりたまへるほど、いとをかしげなり。」（賢木・一八四頁）女盛りで、ゆたかではなやかな感じの人が、病にやつれてほっそりとなさった様子といったらまことに心をひく風情である。と弱々しい表情さえも、源氏には情趣をそそられるものでしかなかった。

右大臣邸には「後の宮も一所におはするころなれば、けはひいと恐ろしけれど」（賢木・一八四頁）と弘徽殿の女御も宮中から退出されていた。何事にも、ましてや源氏の所業に対しては鋭敏ともいえる神経で事態を感知していた人であるので、朧月夜の隠しつつされる行動も、弘徽殿女御には事の全容が見通されていたのではないだろうか。「たびかさなりゆけば、けしき見る人々もあるべかめれど、わづらはしうて、宮にはさなどは啓せず。」（賢木・一八四頁）と源氏との逢瀬が度重なるにつけて、誰彼ともなく知ることとなっていたのであるから、この情報はすぐに弘徽殿の女御に届かぬはずはな

いだろう。そして不思議に妹のこうした行動に対して弘徽殿女御からの叱責が一言もないことに気付く。弘徽殿側は機を狙っていたと考えられる。このような状況を知るにつけても、朧月夜が右大臣家のもち駒として使われていよう。

#### ④ 朧月夜の追懷

濡標の巻で尚侍となっている朧月夜は讓位の気持ちを持つ朱雀帝とそれぞれの感情を語る。このとき朧月夜は源氏について次のように語る。「めでたき人なれど、さしも思ひたまへらざりしけしき、心ばへなど、もの思ひ知られたまふままに、などで、わが心の若くいはけなきにまかせ、さる騒ぎをさへ引き出でて、わが名をばさらにもいはず、人の御ためさへ、などおぼし出づるに、いと憂き御身なり。」と「さる騒ぎをさへ引き出でて」(濡標・一二三頁)とはっきり自分とのことが、須磨流謫の端緒であったと回想する。

## VI ま と め

なぜ源氏は須磨、明石へ行かなければならなかったか。越前などではなく須磨、明石の地でなければならなかった理由とは何であったかを見る必要があった。

須磨、明石の地が設定された理由はすでに多角的に考察されている。例えば地理上<sup>(2)</sup>、経済上の立場から<sup>(3)</sup>、また菅原道真や在原行平の流謫の歴史的事実を踏まえての準用など<sup>(4)</sup>。今回はこれらから直接には離れて考えることとした。

#### ① 物語構成と予言・遺言

源氏物語の構成を管見するに、予言や遺言されたことに導領され物語の進展がなされて行くことに気付く。

桐壺の更衣は父の故大納言の遺言「ただ、この人の宮仕への本意、かならずとげさせてたてまつれ。われ亡くなりぬとて、くちをしう思ひくづはるな」(桐壺・一二三頁)を母君とともに忠実に遂げようとしたことであった。

また明石の上は、父明石の入道から「わが身のかくいたづらに沈めるだにあるを、この人ひとりにこそあれ、思ふさま異なり。もし我に後れてその志とげず、この思ひおきつる宿世違はば、海に入りね、と、常に遺言しておきてはべるなる」(若紫・一八七頁)と志を高く持つことを言われていた。

橋姫の巻では大君、中君は父の八の宮から「おぼろけのよすがならで、人の言にうちなびき、この山里をあくがれたまふな」(椎本・三二九頁)よくよくの頼りになる人でなくては、甘い言葉に誘われてこの山莊をうかうかと出てはなりませんと姫君たちに遺言される。大君はこの遺言を全うすることになる。

それぞれが父の遺言から逃れることなく生き、物語が展開していくことに気付く。当時の高貴な女性の生き方として、絶対なる父の言葉を受け入れることは、極々当然のありかたであった。<sup>(5)</sup>

次に予言等であるが、桐壺の巻では源氏七歳のころ高麗人の来朝者のなかに相人がいるのを帝が知られて宮中に相人を招き入れるのは宇多天皇の誠があったので、源氏を鴻臚館に遣わす。そこで予言で「帝王となる相はあるが、この位に着くと世の乱れを招くかもしれないので、朝廷の柱石となって、国政を補佐するのがよろしいのではないか」と言われる。この言葉を受けてか、桐壺帝は「源」を賜姓し臣下する。

若紫の巻では源氏は異様な夢をみて、夢解きの人に解かせると「及びなうおぼしもかけぬ筋のことを合はせけり。」その中に違ひめありてつしませたまふべきことなむはべる」(若紫・二二五頁)と言われる。するとまもなく藤壺の宮懷妊の噂を知らされる。後の冷泉帝の誕生である。

その他にも明石入道が明石の上誕生の際に見た夢、須磨で源氏の夢に桐壺院が立つことも、物語のプロットを支える支柱となっている。

濡標の巻では明石の上の女子誕生の知らせをうけるが、その時、宿曜に「御子三人、帝、后、かならず並びて生まれた



まふべし。中の劣りは、太政大臣にて位を極むべし」(落標・一七頁)と言われたことを「さしてかなふなめり」(〃)一つ一つ適中するようだと思源氏は思うのである。

以上から予言や夢や占い、そして遺言によって源氏物語のプロットの構築がされているように思える。その予言や夢や占いを夢や空言で終わらせることなくするために物語は進行しなければならなかった。これらの実現を切望した最たる人物こそ、この世で報われず死した桐壺の更衣ではないだろうか。今日の言葉をかりて言い換えるならばハードウェアに当たる箇所は予言や夢や占いの形に変えて組み立てられ、そこに使用されるソフトウェアが、桐壺の更衣の魂をベースとして物語は領導している、と捉えられないだろうか。ひとつの読み方として、作者は予め読者に夢等で予告をする。読者はすでに物語のストーリーを知らされるが、物語中の登場人物や、物語世界だけは知ることなく、展開していく。<sup>(6)</sup>この読者への予告を実行するために、作者は脚色を試みなければならなかった。源氏が須磨、明石へ出向くことがなければ、占いの一つは実現されなかったであろうが、后となる女子の誕生をみるために、なぜ須磨、明石でなければならなかったのか。

## ② 桐壺の更衣と明石入道の血縁

源氏が須磨に朝廷の咎めを受けておいでになると言う噂を明石入道は聞く。そして何とかして源氏にわが娘を縁付けようと決心する。母親はこの言葉に罪科を受けた人に縁付けなくともと反対するが、入道は自己の考えを得々と話し説得しようとする。「罪にあたることは、唐土にもわが朝廷にも、かく世にすぐれ、何ごとにも人に異になりぬる人の、かならずあることなり。いかにものしたまふ君ぞ。故母御息所は、おのが叔父にもものしたまひし按察使の大納言の御娘なり。いとかうざくなる名をとりて、宮仕へに出だしたまへりしに、国王すぐれて、時めかしたまふこと並びなかりけるほどに、人の嫉み重くて亡せたまひにしかど、この君のとまりたまへる、いとめでたしかし。女は心高くつかふべきものなり。おの

れ、かかる田舎人なりとて、おぼし捨てじ」(須磨・二四九頁)入道の口から桐壺の更衣と自分とは従兄弟であることが告げられる。さらに桐壺の更衣が宮中でどのような扱いを受けていたかまで入道は知っていたのである。

明石に源氏を招いて後、入道は娘の将来について源氏に自己の気持ちを打ち明ける。「前の世の契りつたなくてこそ、かくくちをし山がつとなりはべりけめ、親、大臣の位をたまちたまへりき。みづからかく田舎の民となりてはべり。つぎつぎ、さのみ劣りまからば、何の身にかなりはべらむと、」(明石・二七九頁)。かつては親が大臣であったので、都での暮らしも経験したことや田舎暮らしに至り、子孫が次々と落ちぶれ、末はどんな身になるのかと憂慮していることや娘は都の高貴な人に縁付けたいことを話すのである。物語の設定は、明石入道が、都を捨て播磨国の国守の任期が切れた後、この地に留まった理由のひとつに明石と言う地から得られる、豊かな財源に着目したであろうことも想像できる。<sup>(7)</sup> 娘の将来と我門の再興を考えたとき、欠くことのできぬ要素であった。

桐壺の更衣がこの世に残された絆と、「みづからかく田舎の民となりてはべり」と言っているが、中央政界から遠ざかった明石入道の不遇沈淪ともいえる人生に、桐壺の更衣の子、光源氏と、わが娘との縁組は願ってもない好縁であったはずである。作者はこの桐壺の更衣の魂の復活のため、報われずに死した更衣の怨念と子供へのほだしに同情され、また滅亡寸前の一門再興のためにも、この世に残されているたったひとりの頼り人、明石入道のもとへ源氏を差し向けたのではないか。そうしなければ桐壺の更衣の霊はうかばれない。また更衣の思いは桐壺帝の思いでもあるのであった。最愛の子源氏を帝にできなかったことや更衣を死に至らしめてしまった悔いである。

### ③ 朧月夜造型の意味すること

源氏はなぜ須磨、明石に行かなければならなかったかを見てきた。ここでは、前述して来たように、桐壺の更衣の魂の復活ということに焦点を当てた。更衣の復活を成就させるには、源氏はこの地の洗礼を受けなければならなかった。この

地にて榮華を得た明石入道の力をかりる必要があったのである。そのため朧月夜は源氏を何らかの罪人として流謫するために配された決定的人物であった。源氏の好色家と言う、さが（性）を利用したパロックスの方法によって源氏は罪に落とされたと言えよう。しかしこのことが無かったならば、源氏一門の繁榮は、それは桐壺の更衣の血筋の繁榮とも言えるが、後世にみることはできなかった。しからば反勢力側の右大臣家の朧月夜を介して仕掛けられたとみえた流罪の隠遁生活は、以後の繁榮のための梯階でしかなかったことに到達する。

そして「これより大きな恥にのぞまぬさきに世をのがれなむ」（須磨・二〇五頁）と源氏は自ら須磨へ退去した。<sup>(8)</sup>この自発的な行動の裏にある、源氏のそもそもの「もくろみ」とは何であったかを解明しなければならないだろう。それは藤壺との密通によって不義の子をもうけてしまった事実を、如何なることがあろうと隠蔽しなければならなかったことである。不義の子の出生は朧月夜との密通が発覚したことにより世人の目を転向させ、影を潜められたと読むことはできないか。世人の関心事を朧月夜との密通に向けさせることが、出会い当初から源氏の意識下に有ったとは言い難いが、次第に源氏の朧月夜に対する愛情と二律背反して、事は「もくろみ」が含有されて行つたと言及できはしまいか。「とあることもかかることも、前の世の報いにこそはべるなれば、言ひもてゆけば、ただみづからのおこたりになむはべる。さしてかく官爵を取られず、あさはかなることにかかづらひてだに、以下略」（須磨・二〇五頁）と源氏は言う。当時官爵剝奪の罪の一つに強姦罪があったことが、服藤早苗氏<sup>(9)</sup>によって示される。この時、源氏が自己の官爵剝奪の蓋然性を指す、公然とされた罪科の別件が見当たらないことから、朧月夜との密通の罪が有力である。

物語のヒーロー光源氏は行平朝臣の故事を思い、近隣に自己所有の莊園があることも考慮され、「近き所々の御莊の司召して、さるべきことどもなど、」（須磨・二二六頁）須磨の地を決定されたかもしれないが、作者はそれだけの理由で須磨行きを決定させはしなかったのである。

「時々によせて、あはれをも知り、ゆゑをも過ぐさず、よそながらのむつびかはしつべき人は、齋院とこの君とこそは残りありつるを、かくみな背き果てて、以下略」(若菜下・二四三頁)と、その後も源氏は朧月夜の出家まで「齋院とこの君とこそは残りありつるを」と心に染めた人としていたが、源氏の朧月夜に対する扱いは最初からその域を出ることはなく、時々の逢瀬に終わる。朧月夜は花宴の巻に突如として現れ、以後は終始わき役を保って行くが、作者の意図で造型した肉感的な容貌と受容的精神は終章まで褪せることはない。それは「朧月夜に似るものぞなき」と登場したこの言葉に総括されているように思える。花宴の巻は源氏物語の中でも耽美的唯美的である章を内包していると言えよう。

以上述べてきたように、弘徽殿女御の桐壺更衣に対する嫉妬やいじめ、それを晴らすことなく死した桐壺の更衣の怨念は、紆余曲折を経て、わが子が流謫されたことによって、その不幸は、不幸で終わることなく、日の目を見ることができ、それは、父大納言の桐壺の更衣への遺言も時を重ねて後、成就したことになる。弘徽殿の女御等が仕掛けたと思える源氏排斥の行為は、結果として、苦しみを受けた諸々の人の思いが再生するための受難を源氏が受けたことであった。こうした構成から朧月夜は源氏に須磨流謫を執行させるために脚色された人物であったと言えないだろうか。

源氏物語は限りなく幾多の角度から読むことができる。朧月夜の造型についても同様のことが言える。今回は女の物語として源氏物語を読み、試論を行った。

〔注〕

- (1) 秋山虔著「源氏物語」岩波新書・37頁に紹介する、折口信夫が貴種流離譚の話形を読み取ったとする。(『日本文学の発生序説』昭和22・折口信夫著)
- (2) 「源氏物語の鑑賞と基礎知識・No.2 須磨」三五頁。上流貴族が居所を動かしてよいとされる畿内ぎりぎりの地―孫王並び五位以上が畿外に出ることは『類聚三代格』官符にたびたび見られる禁制(タブー)であったとある。

- (3) 新潮日本古典集成「源氏物語」二二二六頁。頭注五。
- (4) 「岷江入楚」は河海抄、花鳥余情を引用。
- (5) 服藤早苗著「平安朝の母と子」中公新書より。結婚の決定権は父親が保持していたが母親が娘の結婚に積極的に働くことは多かったとする。一六頁
- (6) 池田和臣「玉かずら十帖の興趣」方法的実験と内発的生成力・一九九七年二月六日・紫式部学会発表。玉かずら十帖は文学としての興趣（おもしろさ）を試みているが、文学としての保有を維持するために方法上、興趣上との確執があるとされる。さらに方法的実験の論により、読者を意識した作為的な物語の作り方で読者の意表をつく奇抜な方法で書かれているとされる。
- (7) 「延喜式」及び「播磨国風土記」の記述から大國で豊かな國であったことを、物語の背景として読む。
- (8) 源氏物語の鑑賞と基礎知識・No.2須磨「自主的に都を離れた」ことは平安朝の史実にはなく源氏物語の編み出した出処進退の一策である。日向一雅筆。
- (9) 阿部秋生「源氏物語研究序説」及び清水好子「源氏物語論」等が中国の尚書に見える周公旦東征の故事に準拠を見だしている。  
 秋山虔著「源氏物語」岩波新書・46頁  
 服藤早苗著「平安朝の女と男」中公新書